

月刊
JMITU ティニコ



7月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2025 年発行

No.487

正社員と非正規 構造的格差の実態

「同じ仕事、違う待遇…なぜ？
―雇用形態による格差―

近年、同じ職務内容にもかかわらず、雇用形態の違いによって待遇に大きな格差が生じている職場が数多く存在している。正社員と非正規社員（契約社員、派遣社員、アルバイトなど）の間で、賃金、賞与、福利厚生、昇進機会などに差があるのは、日本社会に根深く存在する課題の一つです。

厚生労働省の統計によると、非正規労働者は全体の約37パーセントを占め、特に女性や若年層でその割合が高い。にもかかわらず、同様の業務内容を行なっているにもかかわらず、正社員に比べて賃金水準や雇用安定性が著しく劣るのが現状です。

この格差の背景には、企業が人件費を抑制するために非正規雇用を拡大してきた経緯がある。非正規社員は就業期間が限定的で、正社員に比べて解雇リスクが高いにもかかわらず、同一業務を担当している場合も多い。たとえば、製造業やサービス業では、窓口対応や製品組み立てなど、非正規社員が正社員と同様の仕事を担っているにもかかわらず、時給や手当の差が生じているのが現状です。

ゴールデンウィークや夏季休暇、冬期休暇と社員は月額の給料を保障されているが、非正規はその間の収入はゼロになつてしまう。そのうえ慶弔休暇もない。ボーナスもないそれではあんまりです。

本来、業務内容が同一である以上、待遇にも公平性が求められるべきである。政府は「同一

労働同一賃金」の理念を掲げ、法制度の整備を進めてきているようですが、実態としては例外規定や曖昧な運用が多く、格差は正には至っていません。企業側も正社員と非正規社員を別枠で評価し、昇進や能力開発の機会を非正規には十分に提供していないケースが多々見られます。このような格差は、労働者のモチベーションや職場の一体感を損ない、生産性や定着率、エンゲージメントにも悪影響を及ぼす。待遇の不平等が社会的分断を生む前に、雇用制度そのものの見直しが必要です。

未来ある職場とは、雇用形態に関係なく、尊厳と公正が守られる環境であるべきで、同一労働同一賃金の徹底、公平な評価制度、キャリア形成支援の拡充など、持続可能な人材戦略が必要ですよ。

「Ion1ミーティング」は 必要か？

近年、多くの職場で導入されつつある「Ion1ミーティング」。一人ひとりの声を聴き、成長を促す目的のはすが、現場では“制度疲れ”や“時間泥棒”との声も少なくありません。

そもそも、上司の対話スキルや関係性に左右されるこの制度は、形だけの運用では逆効果になりかねないです。準備不足のまま実施される面談は、単なる雑談で終わり、制度そのものが形骸化します。

また、全社員に定期的な面談時間を確保するには、業務への影響も避けられず、「やることが増えただけ」との不満もあります。そのうえ、誰がどう制度の成果を評価するのか不透明なままでは、持続可能な運用は困難です。

仙洞田一彦

「おはようございます」

声が聞こえた。私は持っていた新聞をテーブルに置いて立ち上がった。本当なら、読んでいた新聞を、と書かなければならないが、目は紙面に

向いていたが、頭はそれどころではなかった。孫娘が生まれたばかりの、ひ孫を見せに来ることになっていたからだ。

夏だから玄関扉は半開きになっている。扉の手前にあるカーテンを開けると、半開きの隙間から孫娘が顔をのぞかせた。

「おじいちゃん、朝早くからすみません」

あらかじめ電話がなければ、

孫娘とは分からない。数年前に結婚式で顔を見たばかりだ。ましてあの時は、結婚式の化粧なのだから、普段と全く違

っただろう。見分けなどつくわけがない。電話の通り、赤ん坊を連れて来たのだから、孫娘だろうというくらい

の感覚だ。 「どうぞ、どうぞ」

私は言った。すると孫娘の夫だろう、半開きの扉を広く開けた。

「お邪魔します」

孫娘の夫が言った。

「こっちの六畳間は冷房が入っているから、こっちへ」

私はふすまを開けて、二人、いや三人を招じ入れた。一人暮らして来客などないから、慌てて掃除をし、座れるだけの空きを作った。

こういう場合は冷たいジュースか何かだろうと思って、コンビニで何種類か買って来ておいた。

昼になったら暑いから、涼しいうちにおいでとは言っておいた。うちに来るには軽の自家用車だから、行き帰りの暑さはあまり心配ないと思うが、朝の方が良いと思ったのだ。その通り、朝来た。私の娘、つまり目の前にいる孫娘の母親から、おじいちゃんに見せに行つて来なさいと言われたらしい。

孫娘の腕に抱かれた子は、まだ目が開いていないのか、眠っているのか分からないが、目を塞いでいる。産着なのか、薄いガーゼを何枚か重ねて着せているようだ。両手は握つたままで、小さな握りこぶし

を作っている。

「冷房は、良くないかな」

冷え過ぎたらやばいかなと思つて、孫娘に聞いた。

生まれたばかりの子にどうすればいいのか分からない。

孫娘の親は、私の娘だが、その娘が赤ん坊のころはどうだったのか、思い出そうと思つても思い出せない。あの頃うちに冷房なんかあったんだろうかとも思つた。

「もう少し弱くして」

孫娘の言葉に、私はあわてて立ち上がり、エアコンのリモコンを取つて「何度」と聞いた。

「一回止めて」

孫娘が言った。

「それなら、おじいちゃんが暑くて困るだろう」

孫娘の夫が言った。

「これじゃ寒すぎ」

孫娘が言った。

「え」と、孫娘の夫が言い、困ったような顔を私に向けた。

「いいの、いいの」

私はあわてて言い、リモコンの「停止」ボタンを押した。

「分からないから、ジュースいろいろ買ってきた。冷蔵庫に入れてある。だから好きなもの出して」

私は孫娘に言った。孫娘は、孫娘の夫に言った。

「出してきた」

「うん」

孫娘の夫は立ち上がった。

「コップも出してあるからね」
私は孫娘の夫に言った。

「はい」

夫は立ち上がって部屋を出て行った。

「おじいちゃん、抱っこしま

す」

孫娘が、赤ん坊を差し出そうとした。私は手を出そうとして引つ込めた。

「壊れてしまいそうで、怖い。

顔が見られればいい」

私が言うと、孫娘は抱いた赤ん坊の顔を私の方に向けた。テーブル越しだが、顔が良く見えるようになった。

この子が私のひ孫か。

相変わらず目は閉じられたまま。手も握りこぶしのまま。親から私、私から娘、娘の娘からこの子。命がつながっている。

私は父のふと漏らした言葉を思い出した。父は中国大陸に兵隊として行った。戦後まで生きられたが、当時の無理がたたり還暦の前に亡くなった。

「逃げられないし、食べるものもないし、自棄になってな。

自爆しかないと思って手榴弾を握り、爆発させた。ところがな、爆発しなかった」

亡くなる直前だったが、ふと、父が漏らした言葉だ。そして言った。

「あの時、手榴弾が爆発していたら、お前はいなかった」

当然だ。私は父が復員して

きた後、生まれたのだから。その後私が読んだ本によると、日本軍が持っていたというか持たされていた手榴弾は、半分以上の六割が不発の粗悪品だったとか。別の本には、銃もなく手榴弾だけを持つての逃亡も描かれていたり、飢え死にも相当いたらしいことも書かれていた。閉塞感から誘導された、侵略戦争の結果の

死ではないのか。

「だがな、お前が生まれたとき、生きていてよかったと思つたよ。命がつながったからな」と、父は言った。

爆発していたら、私もいないし、目の前のひ孫だっていない。ひ孫の顔をあらためて見た。笑顔ならもつといいかもしれないが、目は閉じられたままでも十分いい。

自棄になることなんて、人生、誰にでもあることじゃないか。それも一回や二回ではないだろう。閉塞感に襲われると、どうにもならず、当るところを見つけて自棄を爆発させる。

私だって失恋したとき、どう生きればいいのか分からなくなつたこともあつた。もしあの気持ちに襲われたとき、

目の前が断崖絶壁だったら、飛び降りていたかもしれない。さいわい断崖絶壁でもなければ、高層ビルの屋上にいたわけでもなかった。彼女と別れて、ごくごく普通の道、住宅街をとぼとぼ歩いていた時だった。あるとすれば、赤信号を飛び出して、走って来るトラックの前に身を投げ出し、運転手に迷惑をかけるくらいのことか。こんなことを言ったら、父から「俺のような、生死の境目の場合と一緒にするな。甘ったれるな」と叱られるのだが。

新聞を時折にぎわせている、誰でもいい、二人以上殺して死刑になるんだなどと言って刃物を振り回すのだってそうだ。人それぞれ訳はあるのだろうが、明日も生きようとす

る気持ちに塞がれたときだろう。そんなときの八つ当たり。実際にそうすると、しないとは大きな違いがあるが、瞬間、そんな気分襲われることは誰でもあるに違いない。

「おじいちゃん」

孫娘から言われて、我に返った。

「なに」

「近くにコンビニありますよね」

「あるある、道を出たところに」

「買って来て」

見るとふすまを開けて、孫娘の夫が顔を出している。

「うん」

という声を残してふすまが閉められた。

「飲みたいのがなかったらしいから」

「そうか」

若い人の好みは分からない。私はまたひ孫の顔に視線をやった。

元気な孫娘だって、そんな気持ちに襲われたことがあるだろう。でも、こうしたかわいいい赤ちゃんがいるんだ。生きて来たからだよ。命がなかった。

「ね」

私が赤ん坊に、念を押すように話し掛けた。

「え、なんですか」

孫娘が言った。

「生まれてよかったねって、赤ちゃんに言ったんだよ」

私が言った。

「そうですよ、ねえ」

孫娘は、抱いたひ孫、赤ん坊の両手を、振るように動かし、赤ん坊の代わりの口調になって答えた。孫娘は、その

手を動かしながら、私の顔を見ると聞いた。

「私のおじいちゃんでもいいでしょうけど、この子から言うと、おじいちゃんのこととは何というの」

「ひいじじ」

そう答えると、孫娘は赤ん坊に視線を落として言った。

「ひいじじだよ、ひいじじだつてよ。なんかおかしいね、ひいじじなんて」

「ひいじじだよ、よろしくね」

ひ孫の目は閉じられていたままだったが、私はテーブルの上に身を乗り出すようにして、ひ孫に言った。

テーブルの上に置かれた新聞には「若い世代の閉塞感、選挙結果に反映か」の見出しが見えていた。